



子ども虐待の予防とネットワーク 親子の支援と対応の手引き

評者・長谷川 喜久美 はせ川助産院 助産師

「もう死んでしまったあなたにこんな手紙を書くのはひどいことかもしれないけど、私はこんな手紙を書かなくてはいけないほど、昔あなたから受けた傷に苦しんでいるんだよ」最終ページには亡き母への抗議の手紙が綴られている。本書には、重く辛い心を開き相談してきた当事者たちの生の声が掲載されている。

著者は、虐待の最前線に立ち、長年アディクションや虐待問題に取り組んできた保健師、精神保健福祉士の徳永雅子氏（徳永家族問題相談室）だ。今や虐待関連の本は数々あるが、必要な基礎知識が網羅され、項目に沿って内容がわかりやすく、体験談もいくつか盛り込まれたこのような手引書は希少であり貴重でもある。

コラムも随所に取り入れられ、著者の愛読書であるサン＝テグジュペリ『星の王子さま』のなかの「星の王子さまとキツネ」の話には共感してしまった。どのような話かは読んでいただきたいが、他者への信頼感が希薄な親に対する家庭訪問のあり方など、具体的な方策が提示されている。

子ども虐待防止対策に、厚生労働省は今年度から「乳幼児全戸訪問事業」（こんにちは赤ちゃん事業）を創設した。自治体の新たな取り組みが目され、助産師への期待は大きい。

助産師の訪問は、周産期を通じて母子とその家族に密接なかかわりを持つことができ、あらゆる

予防の観点から取り組む 虐待へのかかわり方



徳永雅子 著
定価 2,940 円（本体 2,800 円＋税 5%）
A 5 判／中央法規出版／2007 年

ケアのなかで、感性豊かな心と鋭い洞察力、そして見極める目を持っている点で有用である。また、何より命の尊さや親子の絆を伝えられる専門職として、予防的支援に有効であることが高く評価されている。期待に沿うよう、このバイブルともいえる本書を手元に置き、助産師のプロフェッショナルリズムを活かしていただきたい。

子ども虐待への対応には、ネットワークが非常に重要だが、なかなか構築されず機能しないのが現状である。事例を抱え込み八方ふさがりにならないよう、ネットワークシステムを上手く活用して支援に臨まなければ、母も子も救えない。ネットワークシステムについては、基本的なところから言及している。中でも、ネットワークを網の目に広がったアメーバーにたとえた説明は誰にもわかりやすい。

親支援のグループケアについては、構造から具体的に理解できる図表に示され、自助グループとの違いがわかり、子ども虐待にかかわっている私には非常に興味深い箇所である。

最終章では、子どもを虐待する親のタイプ別に事例を用いて読み物風に書き進められ、具体的な実践例が例示されているが、自分の事例と重なり新たな気づきが多くあった。

本書は、予防の観点から学ぶことが限りなく得られる内容であり、助産師や母子支援に携わる方へ広く読まれることを期待する著書である。